アメリカのリス

W校　一ねん二くみ

たむら　はるか

わたしが、アメリカにくるまえには、ニューヨークこうがいに、リスがいるとはしりませんでした。そして、ニューヨークにすむようになって、こから、まちのなかにいると、はじめてしりました。

学校からかえってきたあ

る日、おかあさんがいいました。「きょう、リスのあかちゃんを見たよ。」わたしは、「いいなあ。」とこたえました。

そして、一しゅうかんほどたったとき、またおかあさんがいいました。「きょうはすごいことをはっけんしたよ。なんだとおもう。」ときかれたので、わたしは「なんなの。」とききました。

「あのね、きょうリスのあかちゃんのうちをみつけたよ。」それからわたしは、きました。「リスのおうちは、どんなかたちなの。」ときくと、「にわにあながあって、そこにあかちゃんがはいっていったよ。」といいました。また、わたしがききました。「あとでそこのばしょおしえてね。」おかあさんは、「いいよ。」といって

てあとでおしえてくれました。けれど、わたしは一つきになることがありました。「どういうことだとおもいますか。」いつも見かけるリスは、しましまもようがないのに、わたしが見たりスのあかちゃんは、しましまもようなのです。だから、わたしは、「いつも見かけるリスのあかちゃんなのかな。」とおかあさんにきいてみた

らおかあさんは、「そうね。」とこたえました。でも、わたしは、はなしをつづけます。「でもや、ぱりほんとうのりスのあかちゃんじゃないのかな。」

ある日、しらべてみると、いつも見かけるりスのあかちゃんではなくて、べつのしゅうるいのしまりすでした。わたしは、「ほんとうは、あの大きさでも大人なのかもね。」といりました。

わもあります。おにわに、リスがあそびにきます。ぼくは、いつかだっこしてみたいとおもっています。

学校は、スクールバスでいきます。はじめてのったことを、すごくこうふんしました。学校についたら、きょうしつにいって、ぼくの名まえがかいてあるせきを見つけました。せきについたら、せんせいが、ぼくの

はじめてのともだち

赤まつけいすけ

ぼくは、おとうさんのしごとで、アメリカにひっこすことになりました。おかあさんからきいたとき、ドキドキしました。えいごではなせるか、ふあんでした。

六月に、みんなでひっこしてきました。あたらしいおうちは、ひろくて、おに

ことをしょうかいしてくれました。クラスみんなのわくわくしたかおが見えて、ぼくは、たすけてくれるかなとおもいました。

しばらく学校にかようと、だんだんなれてきました。えいごもなれてきたので、おともだちができました。おともだちの名まえは、ザッカリーくんです。こんどザッカリーくんのおうちに

「おどろきいっぱい」

W校二年四組

垣内日菜子

私は、アメリカに来てから、学校でびっくりしたことを見つけました。日本の学校とアメリカの学校は、ちがうと聞いていたけれど、本当にちがいました。

さいしょにびっくりしたのは、スナックタイムがあるということです。みんな

12×12 ①

あそびにいくことになりました。ぼくは、うれしくて、まちきれないです。ランチのときは、となりにすわって、いっしょにたべます。ザッカリーくんは、すごくやさしくて、ゆうきがある男の子です。おにごっこをしてあそんでいるとき、ぼくをガードして、おにからまもってくれました。ぼくのことを、だいじにおもって

12×12

太りそうなものをもって来ていました。ランチタイムでも、おやつのようなものをもって来ています。たとえば、チョコサンド・ジュース・ポテトチップスです。お母さんの作ったものが少なかったです。

じゅぎょうの時も、せいとがゆかにすわって、先生がつくえにすわったので、おどろきました。その時、

12×12 ②

てくれるおともだちができて、うれしいです。

アメリカの学校は、まだえいごができなくて、しんぱいだけど、おともだちができたから、だいじょうぶです。わからないときは、きっとたすけてくれます。だから、学校がすきです。

12×12

女の子もあぐらをかいていたので、また、おどろきました。まだ、えいごが分からないけど、分かるようになったら、とてもたのしいじゅぎょうだと思います。

私が、日本のものをはっぴょうした時、みんながもりあげてくれたので、うれしかったです。クラスの日本人の女の子と、手あそびのアルプス一万尺をしていた

12×12 ③

くさん話せるようになりたいです。

12×12 ⑤

ら、、女の子たちがよって来ました。教えてあげたら、今では、みんなができるようになりました。おれいに、アメリカの手あそびも教えてもらいました。

アメリカに来る前は、ふあんだったけど、今は、たのしいです。アメリカ人のおともだちも、たくさんできました。私は、おしゃべりずきなので、えいごでた

12×12 ④

初めてのふたりぼっち

三年一組　延原　伶

「つれて行けなくてごめんね」

私はチャイとラブに言いました。チャイとラブは、明日から二ヶ月も会えなくなるのに、いっしょに遊ぼうとして、私の顔をペロペロなめたり、おもちゃを口にくわえて持って来たりしていました。

私とママがいない間、パパが一人で犬たちのめんどうを見ないといけないけど、パパは仕事がいそがしくて、家にはほとんどいないので本当にだいじょうぶか心ぱいでした。だけど、それよりも、もっと心ぱいなのは、パパが日本に帰る間の三週間

16×16

ペットホテルに、はいめてあづける
ことです。私はママに、
「やっぱり明日、日本にいっしょに
つれて行こうよ。」
と言いました。だけど、やっぱり答
えはダメでした。
出発する朝、チィイとラブに、
「バイバイ、いい子にしてて ね。」
と言って、なみだが出そうになった
ので、すぐに自分の荷物を持って、
家を出ました。
ひ行きの中でテレビを見ていると、
ラブにについているかわいい犬が出てき
て、今わかれたばかりなのに会いた
くなって、
「チィイとラブに会いたい。」

16×16

私には、兄弟姉妹がいません。
友だちと遊んで帰る時に、姉や弟や
お姉ちゃんと、いっしょに帰って行く
友だちがとってもうらやましくて、
いつもさみしい気持ちになっていまし
た。でも、この兄妹犬をかってから
は少しさみしくなくなりました。
だから、チィイとラブは、私の大切
な妹弟です。なのにさみしい思いを
させてごめんね。来年はぜったいに
つれて来てあげようと思いました。
アメリカに帰る日、十二時間もひ
行きに乗ってるなんて時間がもったい
ないと思いました。私は、
「後、何時間。」
って何回もママに聞きました。

16×16

「て言いながら、さっきはがまんで
きたのになみだがいっぱい出てきて
止まりませんでした。日本に着いて
からも、ママに、
「元気にしているかなー。」
「ちぃんとごはん食べてるかなー。」
「ペットホテルでは、やさしくして
もらえてるかなー。」
って言っていると、ママが、
「あの子たちは、一匹じゃないよ、
二匹なんだからお家でもペットホ
テルでもいっしょに楽しく遊んで
ると思うよ。」
って言ってくれました。
「そうだよね、二人だもんね。」
私は、少し安心しました。

16×16

やっとニューヨークについて、お
家のドアを開けた時、チィイとラブ
は私に向かって走ってきてだいすき
だでした。そして、ニコニコした顔
でとびついてはでむかえしてくれま
した。
「ただいま。チィイ、ラブ。」

16×16

「お兄ちゃん、またね。」

ニューヨークほ習じゅぎょう校W校

三年一組　竹田　桃子

「車が来たら、よんでね。」

母にたのまれたわたしは、家のリビングの出まどから、ドライブウェイを見ていました。

今日は、二〇一四年八月二十四日、お兄ちゃんが日本に帰る日です。父も母もお兄ちゃんも、バタバタしていそがしそうです。

「あっ、車が来た！」。

わたしは、

「もう来ちゃった・・・」。

と思いました。

お兄ちゃんは、十六才、高校一年生です。お兄ちゃんが小学校一年生の夏に、わたしが生まれました。わたしが赤ちゃんの時は、おむつをかえてくれたり、ミルクをのませてくれたり、わたしのおせわをたくさんしてくれたそうです。わたしは、いつもお兄ちゃんにくっついていたそうです。

二年前、ニューヨークに引っこしてきた時も、お兄ちゃんといっしょだったから、さびしくありませんでした。母が、用事でいない時も、バスストップにむかえに来てくれたり、いっしょにおるすばんしてくれたりたよりになるお兄ちゃんでした。ゲームやバドミントンも、たくさんして遊びました。車で出かける時も、いつも後ろのせきで、二人で歌っていました。

でも、お兄ちゃんがいて困っていたこともあります。それは、アイスクリームをいっぺんに、二本食べてしまうことです。母が、六本入りのアイスクリームを買ってきても、

「お兄ちゃんは、体が大きいからね。」

と言って、いっぺんに二本食べてしまうので、アイスクリームのはこは、いつも、二日でなくなってしまいました。

「お兄ちゃん、ずるい！わたしも早く大きくなりたい！」。

そうわたしは、いつも思っていました。

お兄ちゃんが日本に帰ってから、

「サンフランシスコに行きたい」。

と言うので、家族で旅行に行きました。お兄ちゃんが通っていたようち園や、住んでいた家も見に行きました。あちこち行ったけど、お兄ちゃんが一番よろこんでいたのは、アップルとグーグルでした。わたしは、

「中に入れないのに、どこが面白いんだろう」。

と思ったけど、お兄ちゃんが、うれしそうに写真をとっているのを見て、

「お兄ちゃん、来れてよかったね。」

と思いました。

お兄ちゃんが日本に帰ってから、

お兄ちゃんのへやは、荷物がなくなって、空っぽになってしまいました。リビングや、ダイニングテーブルのお兄ちゃんの場所に、お兄ちゃんはいません。いきなり聞こえてきていたトロンボーンをふく音や、口ぶえも、うるさかったけれど、今では、しずかすぎて物足りないです。家でわたしと遊んでくれる人も、いなくなってしまいました。

お兄ちゃんが日本に帰る朝、車に乗ったお兄ちゃんは、手で目をおさえていました。わたしは、お兄ちゃんにいっぱい手をふりました。車が行ってしまった後、しばらく、わたしも母も、何も話しませんでした。

16×16

今度のクリスマスには、お兄ちゃんがニューヨークに、二週間だけもどってきます。わたしのアイスクリームをあげるから、いっぱい遊んでほしいです。

16×16

ぼくがなぜ剣道をはじめたのか

W校三年四組　渡邉　喜

ぼくは、今年のはじまりぐらいから剣道をやっています。なぜ、ぼくが剣道を始めたいと思ったのかは、ドラえもんのアニメで宮本武蔵を見てかっこいいなと思ったからです。宮本武蔵は、休々木小次郎にがん流島の戦いで勝ちました。

武蔵は二刀流と言う、刀と櫂を使って戦うので有名でした。でもこの戦いでは、船の櫂だけを使って小次郎に勝ちました。櫂は刀でせれるのに、武蔵は櫂だけで勝ったのですごく強いのだと思いました。

ぼくと双子の弟のけいは、好きに

16×16

なって、お中になりました。武蔵にお中になってから、お母さんに武蔵やれき史についての本を買ってもらいました。それから、時間がある時武蔵のドラマやドキュメンタリーを見て、武蔵がどのように住んでいたのか、小次郎との戦いはどんなだったのかを知りました。

武蔵は小さい時にお母さんをなくし、お父さんにすてられてしまいました。子供の時、とても悲しい思いをたくさんしました。それでも武蔵は大人になり、六十六回のしあいに一度も負けたことがない、強い剣士になりました。

武蔵を見てから、ぼくも剣道を始

16×16

める事にしました。お母さんに剣道を練習する所を探してもらいました。すると、近くに日本語で練習できる所があることがわかりました。さいしょは、ぼうぐを付けずに練習をしましたが、八か月くらいたってからぼうぐをつけ始めました。ぼうぐをつけるともっと強くなったような気がします。

ぼくの先生や武蔵みたいに、剣道が上手になるにはまだ何年も練習がひつようですが、これからもっと練習をがんばって強くなりたいと思います。

16×16

大きらいから大好きになるまで

W校　五年一組

王村　理紗

私は泳ぐことが大好きです。泳いでいると、頭がすっきりして、いやな事も全部忘れてしまいます。

じつは、私は三年生まで水泳が大きらいでした。なぜかというと、水に顔をつけるのがこわかったからです。友達が学校のプールで楽しそうに泳ぐのを見ても、「別に泳げなくてもいいもん。」と思うと同時に、少しうらやましい気もしていました。

そんなある日父から、

「理紗ちゃん、泳げるようになろうよ。泳げると、とっても楽しいよ。」

と言われました。父は小さいころから長い間水泳を習っていて、大会に出場していたほど上手です。そんな父の言葉にひかれて、スイミングスクールの体験へ行く事になりました。最初は、「いやだなぁ。早く終わらないか

20×20

なぁ。」などとばかり考えていました。水に顔をつけることさえできない私は、とても不安でした。それでも目をつぶり鼻をつまんで、やっとの思いで水にもぐりました。コーチに「大丈夫だから、目を開けてみてごらん。」と言われて、こわごわ目を開けてみました。目の前に水とあわが交じった物が見えて、とてもきれいでした。息が続かず、ほんの一しゅんでしたが。

それから私は、週二回そのスイミングスクールに通うようになりました。すぐに初めての進級テストに合格しました。その後半年間で、四回連続進級テストに合格して、全く泳げなかった私がクロールで二十五メートルを泳げるようになっていました。

そのころには、もう泳ぐ事が楽しくてたまらなくなっていました。このままどんどん進級できる気になっていました。ところが次の背泳ぎのテストで、初めて不合格になってしまいました。私はとてもがっかりして、少し

20×20

やる気がうせてしまった様な気がしました。家に帰ってからなぜ合格できなかったのか考えてみましたが、「完ぺきに泳いだつもりだったのに、なぜだめだったの。」と思うばかりでした。

次の練習の時に、コーチに思いきって聞いてみました。そのコーチは少しきびしいコーチだったので、私はドキドキしていました。

「理紗は、フォームは良いが、バランスが悪い。あと、二十五メートル泳ぎきることしか考えていないから、あちこちぶつかって、タイムが落ちるんだ。」

と、真けんに、くわしく欠点を教えてくれました。確かに私は、ただ二十五メートル泳ぎきることしか考えていなかったので、コーチに指てきされたことを聞いて、目からうろこが落ちる思いがしました。

それ以来私は、コーチに注意されたことを忘れないようにして練習しました。そして次の進級テストには合格することができました。

20×20

平泳ぎ、バタフライとどんどん泳げるようになって、気が付くと百メートル個人メドレーをどれだけ速く泳げるかに挑戦するまでになっていました。

ついにスイミングスクールの一番上の級に進級するためのテストを受ける日がやってきました。ちょうど二年前、スイミングスクールに体験をしに来た日の事を思い出しました。あの時は、まさかこんなに早く、こんなにたくさん泳げるようになるとは、思いもしませんでした。

一番上の級は、百メートル個人メドレーを一分五十九秒九以内で泳げれば合格です。父の転きんでアメリカへ行く事が決まっていたので、チャンスは一回しかありませんでした。私は、コーチに注意された事を忘れないようにして、自分の持っている全ての力を出し切りました。

結果は二分一秒四。残念ながら合格する事はできませんでした。

20×20

一人旅

W校　五年一組

那須　咲代

今年の夏、私は初めて一人で日本へ行きました。弟の夏休みは私の十日後に始まるので、先に日本を楽しもうと私は旅立ったのです。

出発の朝、空港へ行く前、母が

「パスポートなくさないでね。おじいちゃまとおばあちゃまに迷わくかけないでね」

と何度もしつこく言ったので、本当は嬉しいはずの私もすごく心配になってしまいました。

JFKに着くと、チェックインカウンターで父は「ちびっこ一人旅」と書かれた何枚もの用紙に署名しました。いつもと何だか様子が違います。空港内では、ずっと日本人のANAの優しいおねえさんが付きそって、私のパスポートを持って案内して下さいました。おねえさんと話そうとしても、ドキドキしてどう話しかけたら良いかわかりませんでした。でも、飛行機に乗るまでずっと隣に居て下さったので、私は丁寧におれいを言いました。おねえさんが笑顔で

「日本、楽しんで来てね」

とおっしゃった後、向こうで私のお行儀をほめて下さっているのが聞こえました。私はジャンプしたい位ワクワクしてしまいました。

飛行機に乗った私は、パスポートなくさなくて良かった。と密かに思いました。「『一人旅』と言っても、エスコートのおねえさんは居たし、本当に私は『一人』で飛行機に乗っているって言えるのかしら。」そんな疑問が私の頭の中でぐるぐると回っていました。

久しぶりに乗った弟のいない静かなフライトでした。結局、私は普通母と一緒に搭乗する時よりもっと長くビデオを見たり、読書したりして、少ししか寝ませんでした。でも、母に「こぼさないでよ。」とか「急いで。」と言われずゆっくり食べられた機内食は、いつもよりおいしい感じがしました。

日本の空港では、ANAのグランドホステ

20×20

アメリカに来てからも、私の住んでいる町の水泳チームに入る事にしました。これからもずっと水泳を続けていくつもりです。

水泳を通して、例え最初はきらいだと思った事でも、努力をすれば大好きな事に変えられるのだと私は気付きました。今後何かきらいだと思う事があっても、まずはできるように努力をしようと思います。

20×20

スのおねえさんが付きそって、私を空港で待っていた祖父母の所まで連れて行って下さいました。祖父母は大勢の人々の前に立っていて、私が出て来ると手を振ってくれました。私は祖父母の顔を見て「本当に日本に着いたんだなあ。」と実感しました。祖母は「咲代ちゃん、すごい。一人でニューヨークから飛行機に乗って来られるなんておねえさんになったわね。」とほめてくれました。私は嬉しかったので、にっこりしましたが、心の中では「いろいろな人に助けてもらって、私は本当に『一人』で来たのかな。私は本当に『おねえさんになった』と言えるのかな。」という不可解な気持ちが残っていました。

母と弟が来るまで約十日間あるのです。私は「頑張るぞ。」と決心しました。でも最初二日間は時差ぼけでたくさん寝てしまいました。週末明けからすぐに私は毎年夏お世話になっている鳥沼小学校に通い始めました。親友

と私は思わずにっこりしてしまいました。そして、「自分はやっぱりおねえさんになったんだ。」と何だか自信がわいてきました。

私は最初「一人旅」というのは飛行機に一人で乗って旅する事だと思っていました。でも、実は、一人での搭乗時間よりも、きちんと自覚をして自分の行動一つ一つに責任を持とうと努力して過ごした祖父母の家での十日間の方がずっと私を成長させてくれた気がします。そんな事を母に言ったら、母からこんな事を言われました。

「咲代ちゃんにとっての『一人旅』って文字通り一人で旅行した時間じゃなくて、自分で『おねえさんになれた』と思えたおじいちゃまとおばあちゃまの家での十日間だったんじゃないかしら。」

九月から私は現地校で中学生になりました。あの「一人旅」の後だから、自由のある中学で、私は自覚と責任を持って、毎日を楽しく過ごす事が出来ているのかもしれません。

ののかちゃんは違うクラスでがっかりしましたが、同じクラスには前も同じクラスになったことのある優しい子たちが何人も居たので、私はすぐに友達が出来ました。

祖父母の家で、私は意識していろいろと頑張ってみました。私は普通、整理整とんが苦手ですが、部屋をきれいに保ちました。洋服をちゃんとたたんだり、自分の身の周りの事もきちんと自分でやってみました。また、テーブルの配膳やお皿洗い等、祖父母の手伝いも自分から進んでたくさんしました。そして、きちんと自ら早寝早起きをして、私は祖父母に絶対に迷わくがかからないようにしたのです。また、現地校と補習校の夏休みの宿題を母が来る前に出来るだけたくさん終わらせようと、一生懸命勉強しました。

母達到着三日前、私は祖父に「咲代ちゃん、宿題はどの位終わったかな。」ときかれました。祖父に終えた分を見せながら「こんなにいっぱい出来たんだ、すごい。」

「応援団長になって」

ニューヨーク補習授業校　六年　一組

松浦　亮太

今年、ぼくは運動会の応援団長になりました。ぼくは、応援団長は大変な仕事ということを知っていました。だからこそ、ぼくは、応援団長になりたいと思ったのです。

ぼくが応援団長になろうとしたきっかけは一つあります。それは、応援団長とはみんなを一つにまとめ、ぼくの受け持った赤組を勝利にみちびくことができる、すばらしい仕事であること、そして、今まで見てきたくさんの応援団長が声を張り上げ、一生懸命みんなをまとめようとしていることから、やってみたいという気持ちがわいてきたのです。

ぼくは、運動会の応援団長を決める日、応援団長になれることを願って、手を挙げ、心をこめてその気持ちをみんなに伝えました。そのおかげで応援団長になれたのだと思います。なので、応援団長になれたのは自分のおかげ

であると思うけれど、自分を選んでくれた、みんなのおかげでもあり、また今まで、ぼくにとてもすばらしい演技を見せてくれた、応援団長さんのおかげでもあると思っています。

毎年、六年生は組体操と応援を下級生の目の前で見せることになっていて、それらを完璧にするために、まず朝練を始めました。副団長と応援のアイデアを出し合い、六年一組全員で心を合わせて声を出しました。組体操の練習では、色々な技を六年生全体でがんばりました。波、馬、おうぎ、ピラミッドと、力を合わせなければ成しとげることのできない技を約四週間、さらに一週間に約四十五分の練習時間でやりました。最初のころは、全然できなかったものが、練習を重ねるにつれてどんどんできるようになりました。でもやはり、完璧ではありませんでした。応援の練習も組体操をやっている時間にやりました。応援には、ダンスも入っていて、それもやりました。

りましたが、転んでしまい、さらに少し差が広がってしまいました。最後の仲のいい四人組がだれが見てもびっくりしてしまう、とても速いスピードで、走っていましたが、あと十センチメートルほどのはばで負けてしまいました。テントに戻っている時、四年の弟に、

「どっちが勝った？」

と聞いて来たので、

「負けたよ。」

と答えたらとても残念がっていました。次の競技は徒競走です。ぼくは、一年生の時しか徒競走で一位になったことがありませんでした。でもぼくは、テープを切る二秒前、白組の男の子と並びました。そして、飛び込むつもりで一歩をふみだしました。そのおかげで一位になることができました。ぼくはとても喜びました。次はついに応援合戦の番が来ました。ぼくは、間違えず、心を合わせて、大きな声でやりました。おどりもしっかり、練習通りにできました。続いて、組体操の番が

運動会当日、これで最後だ、と思いながら一生懸命練習をしました。まず、応援の練習をしました。これは完璧にできたと思います。ダンスも上手にできたと思います。でも、組体操は、なかなかそろわなかったので、何回も練習をくりかえしましたが、それでもそろいませんでした。そのまま、ついに練習の時間が終わってしまいました。さあ本番の時です。昼ご飯の時間に、ぼくはお母さんとお父さんの席の方へ向かいました。ぼくはその時、お父さんとお母さんに、かっこいい顔いを三つ教えました。一つ目は、組体操が成功すること。二つ目は、応援合戦でミスをしないこと。そして、三つ目は運動会で優勝することと。それがかなうことを願って、六年一組のテントの下へ向かいました。まず一番最初の競技は、「一致団結」という四人五脚、又は五人六脚の競技です。競技の前半は女の子が転んでしまい、差が付いてしまいました。そしてぼくたちも追い付こうとがんば

来ました。この組体操も、すべて完璧にできました。あとは声を残す必要がないので、赤組優勝を願って精一杯、声を出し、旗を振りました。さあ、ついに最後の競技、「紅白対抗リレー」。赤組は一位だったので百点という高得点を取りました。閉会式。ぼくは、初めて優勝カップを持ちました。白組を下しました。ぼくはカップを高く高く持ち上げました。ぼくは、最後の運動会で勝ててうれしく思っています。なぜなら、ぼくは、三年生まで勝ったことがありませんでした。でも、学年が上がるにつれて、成績も良くなりました。

ぼくはこの運動会は一生心に残ると思います。ぼくは、運動会の前に言った願いがかない、徒競走でも一位を取れたことがとてもうれしく思っています。そして、ぼくは二つ思っていることがあります。それは、運動会の応援団長をしてよかったということ、そしてまた来年の運動会で、ぼくを見て、応援団長になりたいという人が増えるということです。